

第 2 1 回 北上川水系河川整備学識者懇談会

議事要旨

開催日：令和 6 年 1 1 月 1 8 日（月）

開催時間：1 4 : 0 0 ~ 1 6 : 0 0

開催場所：T K P ガーデンシティ 仙台 ホール 2 1

（対面 W E B 会議併用）

（事務局説明を除く質疑応答について記載 ○：委員、●：事務局）

1. 座長の選出

- ・第 21 回懇談会以降の座長は梅田委員に、副座長は小笠原委員とする。

2. 北上川総合水系環境整備事業の再評価について

- 評価完了済み箇所は、今後、全く事業効果等の確認や報告は行われぬのか。
- 水系全事業が完了した時点で、総括的な事後評価を実施したうえで報告する予定である。
- CVM 調査アンケートの有効回答数について、母数に関係なく常に 300 票と定められている理由は何か。また、母数が少ない場合の有効回答数を教えて欲しい。
- 統計上、母数が大きくなっても回答 300 票程度で収束するという知見を踏まえ、有効回答数 300 票を確保するよう実施している。また、母数が少ない場合は最低 50 票としている。

- 河川は治水と利水と環境とを含むもの、このため事業評価では多面的な視点が必要と考える。環境整備事業も当然洪水の影響を受ける訳であり、新たに水害で被害を受けた場合の影響を考慮しないと正確な評価にならない。
- 河川巡視や水辺の国勢調査で定期的に河川環境を確認しており、災害等で施設が被害を受けた、機能を損なった場合には、部分補修や復旧を行っている。
- 河川管理者として治水も利水も環境も重々認識し良い河川を目指しているところであるが、災害の影響もまとめていく必要性はあると感じていますので、時間を頂きながら対応していきたい。

- 北上川全体の自然再生事業の全体像が見えない、水辺の国勢調査を過去から遡って見たうえで背景を整理すると更に良い。
- 計画が割と進んだ時点では有識者に意見を聞いても時間的に反映することは難しい、整備を予定している箇所については、企画や設計の早い段階から有識者に対して色々と相談しながら進めると良い。
- 今回の北上川下流自然再生については、有識者で構成する自然再生の委員会を立上げ、これまで議論を重ねながら検討を進めてきているところである。

- かわまちづくりは将来までのメンテナンスが重要、整備したものが劣化しないように地元の NPO との協業や事務所 O B を活用するなど人材も含めて、ソフト面で盛上げて行くような仕組づくりが重要である。
- しっかりメンテナンスすることが重要ですので、自治体や協議会等と連携しながら進めて行きたい。

- 北上川下流自然再生について、高水敷が環境、低水敷が治水と切分けている印象を受けるが、生物の観点からは、エコトーンとして考慮する必要がある。
- 広域地盤沈下で下がったものが元に戻るのではなく、それ以上に上がっていることが課題、北上川下流自然再生は変化が大きい上流部を盤下げすることによって全体的に維持して行こうという考えであり、盤下げだけでは無く水路を掘るなど、ほかの生態系にも配慮した進め方で工夫をしながら、回復目標も定めモニタリングを継続しつつ、地域の皆様にも参加をいただきながら進めて行く計画としている。

- かわまちづくりは、市民の期待や評価を明らかにしながら、個々の個性や上流・下流全体としての取組を進めて欲しい。
- 北上川では上下流の自治体との連携会議を立上げ、情報を共有しながら色々な議論を進めているところです。

- ヨシ原の面積変化には、津波以外にも洪水や温暖化なども影響を与えているのか。
- 津波を受け大きく減少したのが最大の原因、自然の回復力で戻ってきつつあるものの元までには至らず、広域地盤沈下後の地盤上昇も収まらない状態、上昇に伴い陸地の湿潤性が失われ将来シミュレーションの結果では減少方向に転じる予測となっている。
- トンボや鳥類など水辺の生物は、ヨシ原面積の回復に応じて帰ってきているという事につながっているのか。
- 生息位置は少しずつ変化しながらも確保できていると判断しており、そこからもっと変化する事が無いようにしようという計画としている。

- 少なくとも 5 年間はモニタリングしているが、自然再生とかわまちづくりの事業は関連のある場所で動いていることから、相互の関連性を長期的にモニタリングしてフォローしなければいけない。例えば、上空からの写真画像を活用して全体像が肉眼でも分かる俯瞰図で整理し変化を把握できるような資料が必要である。
- 意見を踏まえ今後のモニタリング内容を検討していきたい。

3. 北上川水系河川整備計画の進捗状況について

- 冬になると一関遊水地全体にハクチョウやマガンが大量に飛来し休息やエサとりをしており、ねぐらとしている可能性もある。野鳥観察舎のようなものがあれば、鳥にも影響が無く地域活性化にも繋がると思うので活用方策について地域で考えて欲しい。
- 基本高水は 1/150 とのことだが、いつ頃できるのかが問題、年間予算で何年かかるのか概算したうえで現在の進捗状況を整理し、きちんと計画を立てる必要がある。
- 基本方針については非常に長い時間がかかるため、その間に社会情勢が変化してしまい整備の内容も変化していく可能性があることから、目標とする流量を定めたとうえで段階的に整備を進めるとの位置付けとしている。そのため、河川整備計画では当面 30 年間で整備を行う具体的なニューを定めたとうえで整備期間や事業費を示して進めているところである。
- 草刈は年に何回ぐらい行われているのか、刈草は酪農家等に販売しているのか。
- 草刈は堤防の範囲を年 2 回刈っており、刈草は無償で提供している。
- 我々でも色んな研究が始まっている、遊水地を何かのモニタリングサイトに登録してはどうか。
- 全体で 30 年間の取組であれば河川の全体像が見えない部分が特に支川で結構あるので、生物のモニタリング地点を増やして欲しい。
- 北上川のモニタリングは一定の水準をカバーできていると考えている。
- 北上川の治水対策の選択肢として川幅を広げる方法は候補としてあり得るのか。
- 流域治水型として堤防に頼らない整備としての選択肢は考えられるが、周りも含めた生態系全体での川の役割も重要と考えている。
- 東北の川は山脈の間を細い氾濫原で流れている川が多い、堤防の代わりに輪中堤にした場合、治水安全度や費用がどうなるのかという東北ならではの検討を進めて欲しい。

4. 審議結果

- ・以下のとおりとすることで、懇談会の承認を得た。
 - 事業の継続は妥当と判断とする。
 - 下記のとおり参考意見を付する。
 - (1) 完了済みの箇所については、引き続き状況把握に努めること。
 - (2) 自然再生事業については、計画段階から河川全体の環境を視野に入れ、定量目標を検討すること。
 - (3) かわまちづくり整備箇所については、地域と連携を図り、維持管理方策を検討すること。
 - (4) 自然再生事業とかわまちづくり事業を進めるにあたって、互いに調和を図ること。